

詩篇 89 篇

0 エズラフ人エタンのマスキール

《永遠に続くダビデの王座》

- 1 私は、【主】の恵みを、とこしえに歌います。あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます。
- 2 私はこう言います。「御恵みは、とこしえに建てられ、あなたは、その真実を天に堅く立てられる」と。
- 3 「わたしは、わたしの選んだ者と契約を結び、わたしのしもべダビデに誓っている。
- 4 わたしは、おまえのすえを、とこしえに堅く立て、おまえの王座を代々限りなく建てる。」セラ

《天地を統べ治め給う主》

- 5 【主】よ。天は、あなたの奇しいわざをほめたたえます。また、聖徒たちの集まりで、あなたの真実をも。
- 6 まことに、雲の上ではだれが【主】と並びえましょう。力ある者の子らの中でだれが【主】に似ているでしょう。
- 7 主は、聖徒たちのつどいで大いに恐れられている神。主の回りのすべての者にまさって恐れられている方です。
- 8 万軍の神、【主】。だれが、あなたのように力がありましょう。【主】よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。
- 9 あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます。
- 10 あなたご自身が、ラハブを殺された者のように打ち砕き、あなたの敵を力ある御腕によって散らされました。
- 11 天はあなたのもの、地もあなたのもの。世界とそれを満たすものは、あなたがその基を据えられました。
- 12 北と南、これらをあなたが造られました。タボルとヘルモンはあなたの御名を高らかに歌います。
- 13 あなたは力ある腕を持っておられます。あなたの御手は強く、あなたの右の手は高く上げられています。

《義と公正》

- 14 義と公正は、あなたの王座の基。恵みとまことは、御前に先立ちます。
- 15 幸いなことよ、喜びの叫びを知る民は。【主】よ。彼らは、あなたの御顔の光の中を歩みます。
- 16 彼らは、あなたの御名をいつも喜び、あなたの義によって、高く上げられます。
- 17 あなたが彼らの力の光栄であり、あなたのご恩寵によって、私たちの角が高く上げられているからです。
- 18 私たちの盾は【主】のもの、私たちの王はイスラエルの聖なる方のものだからです。

《ダビデ契約の再考》

- 19 あなたは、かつて、幻のうちに、あなたの敬虔な者たちに告げて、仰せられました。「わたしは、ひとりの勇士に助けを与え、民の中から選ばれた者を高く上げた。
- 20 わたしは、わたしのしもべダビデを見だし、わたしの聖なる油を彼にそそいだ。
- 21 わたしの手は彼とともに堅く立てられ、わたしの腕もまた彼を強くしよう。
- 22 敵が彼に害を与えることはなく、不正な者も彼を悩ますことはない。
- 23 わたしは彼の前で彼の仇を打ち砕き、彼を憎む者を打ち倒そう。

- 24 わたしの真実とわたしの恵みとは彼とともにあり、わたしの名によって、彼の角は高く上げられる。
- 25 わたしは彼の手を海の上に、彼の右の手を川の上に置こう。
- 26 彼は、わたしを呼ぼう。『あなたはわが父、わが神、わが救いの岩』と。
- 27 わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。
- 28 わたしの恵みを彼のために永遠に保とう。わたしの契約は彼に対して真実である。
- 29 わたしは彼の子孫をいつまでも、彼の王座を天の日数のように、続かせよう。
- 30 もし、その子孫がわたしのおしえを捨て、わたしの定めのうちを歩かないならば、
- 31 また、もし彼らがわたしのおきてを破り、わたしの命令を守らないならば、
- 32 わたしは杖をもって、彼らのそむきの罪を、むちをもって、彼らの咎を罰しよう。
- 33 しかし、わたしは恵みを彼からもぎ取らず、わたしの真実を偽らない。
- 34 わたしは、わたしの契約を破らない。くちびるから出たことを、わたしは変えない。
- 35 わたしは、かつて、わが聖によって誓った。わたしは決してダビデに偽りを言わない。
- 36 彼の子孫はとこしえまでも続き、彼の王座は、太陽のようにわたしの前にあろう。
- 37 それは月のようにとこしえに、堅く立てられる。雲の中の証人は真実である。」セラ

《永遠の王国は何処に》

- 38 しかし、あなたは拒んでお捨てになりました。あなたによって油そそがれた者に向かって、あなたは激しく怒っておられます。
- 39 あなたは、あなたのしもべの契約を廃棄し、彼の冠を地に捨てて汚しておられます。
- 40 あなたは彼の城壁をことごとく打ちこわし、その要塞を廃墟とされました。
- 41 道を通り過ぎる者はみな、彼から奪い取り、彼は隣人のそしりとなっています。
- 42 あなたは彼の仇の右の手を高く上げ、彼の敵をみな喜ばせておられます。
- 43 そればかりか、あなたは彼の剣の刃を折り曲げ、彼が戦いに立てないようにされています。
- 44 あなたは、彼の輝きを消し、彼の王座を地に投げ倒してしまわれました。
- 45 あなたは、彼の若い日を短くし、恥で彼をおおわれました。セラ

《いつまで》

- 46 いつまでですか。【主】よ。あなたがどこまでも身を隠し、あなたの憤りが火のように燃えるのは。
- 47 どうか、心に留めていてください。私がどれだけ長く生きるかを。あなたはすべての人の子らをかかむなしいものとして創造されたかを。
- 48 いったい、生きていて死を見ない者はだれでしょう。だれがおのれ自身を、よみの力から救い出せましょう。セラ
- 49 主よ。あなたのさきの恵みはどこにあるのでしょうか。それはあなたが真実をもってダビデに誓われたものです。
- 50 主よ。心に留めてください。あなたのしもべたちの受けるそしりを。私が多くの国々の民のすべてをこの胸にこらえていることを。
- 51 【主】よ。あなたの敵どもは、そのようにそしり、そのように、あなたに油そそがれた者の足跡をそしりました。

《頌栄》

- 52 ほむべきかな。【主】。とこしえまでも。アーメン。アーメン。

本篇でもって詩篇「第三巻」は終幕となります。第三巻を締めくくるこの長篇には、イスラエル王国の栄光と衰退の両極が詰め込まれています。より正確に言うならば、約束された「永遠の王国」の影も形もない現実を見て、詩人は嘆き悲しんでいるということです。本篇が書かれた時代背景にはいくつかの説がありますが、最も現実味があるのはバビロン捕囚によって崩壊した祖国を見て、その無残な姿に打ちひしがれる詩人の姿でしょう。ゆえに、本篇で「そしられた」(41節、51節)とされる王とは、捕囚期に即位後わずか3ヶ月でバビロンへ強制移住させられたエホヤキン王のことではないかとも考えられています。

本篇の構造を理解しやすくするため、色分けをしました。

オレンジ (1～4節、19～37節) ……ダビデ契約

青 (5～18節) ……神の属性 (恵みと真実／義と公正)

緑 (38～51節) ……ダビデ王国の崩壊

このように見てみると、本篇全体を貫いているのはダビデに対する神の約束であり、その約束は神の絶対的な属性によって保証されているはずなのに、その王国が崩壊するという不可解な現実を見て、詩人はまったく理解できずに苦しんでいるという骨子が浮かび上がってくるでしょう。

1～4節では、Ⅱサムエル7章に描かれた「ダビデ契約」が要約されています。この時、ダビデは神のために家を建てようとしたのですが、その志を喜ばれた神が逆に彼のために永遠の「ダビデ王国」を築くと約束してくださいました。

19～37節では再び「ダビデ契約」が振り返られています。ここでの内容は1～4節をはるかに凌駕するものです。ここに綴られているダビデへの約束の数々を数えてみるとよいでしょう。19節から29節まで、配慮に配慮を重ねた神からの祝福が列挙されています。ここにおいて、ダビデは「ひとりの勇士」と呼ばれ(19節)、「わたしのしもべ」と特別に扱われ(20節)、神の御手によってその王国は確立され(21節)、敵は打ち破られ(22～23節)、繁栄が約束され(24節「角を高く上げる」)、ダビデの支配の広さが謳われ(25節「海」「川」)、彼は神を「父」「救いの岩」と呼ぶことが許され(26節)、「長子」とされ(27節)、子孫の永続が保証されています(28～29節)。

一方、神は人との契約において常に「御心に背く者への呪い」を対置されます。30～32には、掟を破った者が罰せられるということが添えられてもいます。しかし、この「ダビデ契約」の内容は圧倒的に祝福の占める割合が多く、33～37節では今ひとたび語られた「呪い」が覆われるかのように、「恵みをもぎ取らない」「真実を偽らない」(33節)、「契約を破らない」(34節)、「偽りを言わない」(35節)と、固い約束のことばが並べられます。

5～13節では、天地万物を治め給う神の栄光が誉め讃えられています。「天による賛美」(5節)、「天上で御使いによって崇められている神」(6～7節)、海とその巨獣(ラハブ)を静める方(9～10節)、「北」「南」という領域からも「タボル」「ヘルモン」という山々によってさえも賛美される方(12節)と、多くの詩的表現を織り交ぜながら神が賛美されています。

本篇の中に多く出てくる「恵みと真実」という表現は、神の契約における忠誠を表すものです。「恵み」(חֶסֶד／ヘセド)と「真実」(אֱמוּנָה／エムナー)は美しい組み合わせであり、本篇では1節、2節、14節、24節、28節、33節、49節に出てきます。また不完全ながらも「真実」だけの部分も5節、8節、37節にあります。これらのことばをもって、神が絶対に契約を破らないお方であることが力強く宣言されています。

それだけではありません、14節には「義と公正」も登場し、神の倫理的な基準の絶対性が表されています。ダビデ契約はこれらの神の属性を基として立てられたものなのです。

ところが、38節では様相が一変し、暗雲が立ち込め始めます。先のダビデへの約束が反故にされたかのような国家の崩壊が現実となってしまったのです。「捨てられた」(38節)、「契約は廃棄された」(39節)、「(神殿は)廃墟となった」(40節)、「敵にそしられている」(41～42節)、「戦う力は失われた」(43節)、「栄光は去った」(44節)、「王国は時ならぬ時に終わってしまった」(45節)と、絶望に絶望が書き加えられていきます。

そして、46節以下ではひたすらに回復を求める祈りがささげられる。「心に留めてください」「心に留めてください」と(47節、50節)。そして、詩人は「さきの恵み」にこだわり(48節)、神にどうかご自身の真実を思い出させようとしています(49節)。

これで終わってしまうのです。第三巻はハッピーエンドではなく、暗雲に覆われたまま締めくくられてしまいました。辛うじて52節には頌栄が添えられていますが、元々この部分は本篇にはなかったものと考えられています。詩篇の編集の段階で、まとまりを持たせ、やはり神に栄光を帰さなくてはならないという意図で書かれたものでしょう。

18歳で捕囚民となったエホヤキン王は、その後37年間異国の王の養いの下に生きることとなったのです。ダビデ王国の栄光とはかけ離れた姿でありました。

ユダの王エホヤキンが捕らえ移されて三十七年目の第十二の月の二十七日に、バビロンの王エビル・メロダクは、彼が王となったその年のうちに、ユダの王エホヤキンを牢獄から釈放し、彼に優しいことばをかけ、彼の位をバビロンで彼とともにいた王たちの位よりも高くした。彼は囚人の服を着替え、その一生の間、いつも王の前で食事をした。(Ⅱ列王25:27-29)

さて、第三巻を終えるに当たって、「ダビデ王国」が根こそぎ神の御前から姿を消したのかどうかについて考えておきたいと思います。バビロン捕囚に遭った民には、そう見えざるを得なかったでしょう。ところが、この捕囚はやがて終焉を迎え、ユダの「残りの者」は祖国へと帰還していくこととなります。神は歴史上に何度も訪れる「地が減びるような出来事や虐殺」の時にも、必ず「残りの者」と呼ばれる人々を残されるのです。この残った少数の信仰者によって、ダビデ

王国は存続し続けていきます。更に、その細い信仰の系図から、ついに待望のメシヤが誕生することになるのです。「永遠のダビデ王国」はこの方によって実現することになる。希望の見えない詩篇、されど希望を秘めた詩篇でもって、第三幕は閉じられたのでした。その証拠に、本篇にはいくつものメシヤ預言を思わせる聖句が存在します。

- ・ わたしは、おまえのすえを、とこしえに堅く立て、おまえの王座を代々限りなく建てる。(4 節)
- ・ わたしは、ひとりの勇士に助けを与え、民の中から選ばれた者を高く上げた。(19 節)
- ・ わたしは、わたしのしもべダビデを見いだし、わたしの聖なる油を彼にそそいだ。(20 節)
- ・ わたしの真実とわたしの恵みとは彼とともにあり、わたしの名によって、彼の角は高く上げられる。(24 節)
- ・ わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。(27 節)
- ・ 彼の子孫はとこしえまでも続き、彼の王座は、太陽のようにわたしの前にある。(36 節)